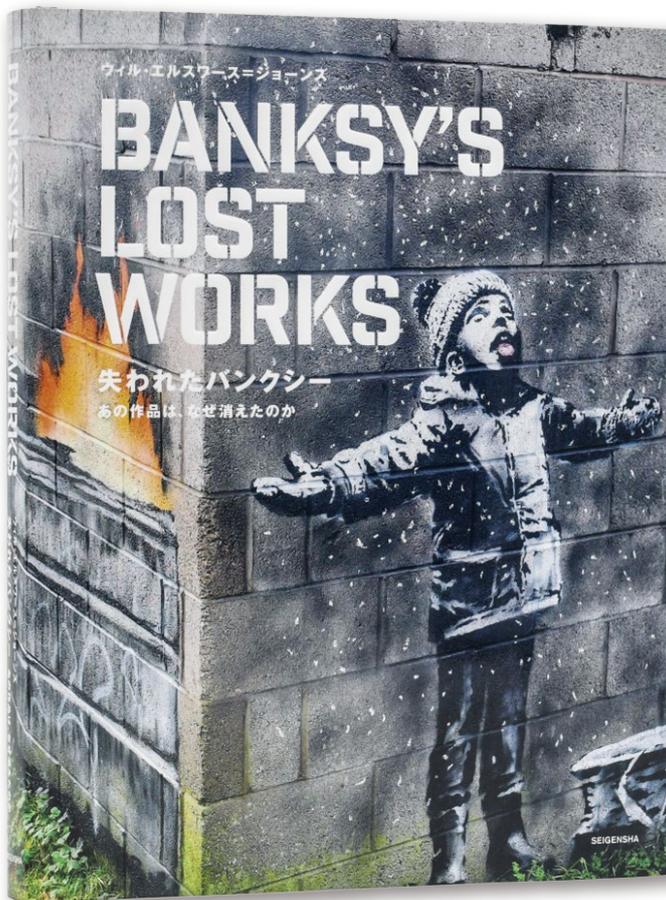


平素より大変お世話になっております。  
このたび小社では、標記の書籍を刊行する運びとなりましたのでご案内申し上げます。

ストリートアートの宿命か、はたまた商業主義の犠牲か——。  
世界を挑発し続けるアーティスト、バンクシーの作品消失の謎を追う

# 失われたバンクシー

## あの作品は、なぜ消えたのか



株式会社青幻舎は、ジャーナリストのウィル・エルスワース=ジョーンズ著『失われたバンクシー あの作品は、なぜ消えたのか』を2025年8月下旬に刊行いたします。本書は、謎多きストリートアーティスト・バンクシーが30年以上にわたるキャリアのなかで創造し、現在元の形で存在しない作品たちの運命を、詳細に掘り下げていきます。

本書への取材などご要望がございましたら、下記の連絡先までご一報下さい。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

株式会社青幻舎 東京支社  
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-14-3-6F  
TEL 03-6262-3420 / FAX 03-6262-3423  
担当 太田: oota@seigensha.com

## ■ 書籍概要

場所の文脈と不可分 & 万人に開かれていたはずの表現が、広く価値を認められたがゆえに  
切り取られ、囲われてゆく.....もはやこの皮肉な構造すら「バンクシー的」、なのか?!

——宇多丸(RHYMESTER)

故郷であるイギリス・ブリストルを中心に、世界各地に30年にわたり作品を描いてきたバンクシー。壁、ドア、歩道、車両など、多種多様な「キャンバス」に描いてきた作品は、一過性というストリートアートの特性に加え、その爆発的な人気ゆえ、今ではそのほとんどが描かれた場所から消え去っています。

本書では、バンクシーの重要作品50点を中心に、なぜ、そしてどのようにして、姿を消したのか核心に迫ります。清掃員による徹底的な除去から、建造物の解体工事、アートディーラーによる「保護(保管・販売)」を目的とした撤去、他のグラフィティアーティストとの確執による上書き……。作品消滅の背景を、豊富な写真、具体的事例、関係者へのインタビューなどを通して明らかにしていきます。

また、本書の翻訳監修には、バンクシーの活動を初期から注目し続け、『バンクシー アート・テロリスト』『覆面アーティスト バンクシーの正体』(監修)などの書籍を手掛けてきた、毛利嘉孝氏(社会学者、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)が務めます。

バンクシー芸術の本質、作品の金銭的価値、ストリートアート本来の一過性の性質について読者に問いかける、ありそうでなかったバンクシーのガイドブック的一冊です。



## ■ 書誌情報

発売: 2025年8月下旬  
書名: 失われたバンクシー  
あの作品は、なぜ消えたのか  
著者: ウィル・エルスワース=ジョーンズ  
翻訳監修: 毛利嘉孝  
判型: B5変  
総頁: 144頁  
製本: 上製  
定価: 2,970円(本体2,700円)  
ISBN: 978-4-86152-989-4 C0071

## ■ 著者プロフィール

**ウィル・エルスワース=ジョーンズ**(Will Ellsworth-Jones)  
イギリス、サンデー・タイムズ紙の主任記者、同紙ニューヨーク特派員を務めた他、テレグラフ紙、インディペンデント紙、サガ紙で編集部部門要職を歴任。著書『バンクシー 壁に隠れた男の正体(原題 Banksy: The Man Behind the Wall)』(パルコ出版、2020年)は世界8カ国で展開されている。

### 毛利嘉孝(もうり・よしたか)

社会学者。専門はメディア/文化研究。東京藝術大学・大学院国際芸術創造研究科長・教授、音楽学部音楽環境創造科教授。特に現代美術や音楽、メディアなど現代文化と都市空間の編成や社会運動をテーマに批評活動を行う。主著に『バンクシー: アート・テロリスト』(光文社新書)、『ストリートの思想』(日本放送出版協会)など。

# ■ 内容紹介

## ・消えるダイヤモンド(The Disappearing Diamond)

アメリカ・デトロイトの荒廃した地域に描かれた《ダイヤモンド・ガール》。ファンが裕福な人にも買われるのを防ぐため撤去しようと試みるも、最終的には誰かに持ち去られたのか、行方不明になっている。

### 11 THE DISAPPEARING DIAMOND

#### 消えるダイヤモンド

▼ VAN DYKE, BETWEEN MILTON AND PALMETTO, DETROIT MI 48234  
アメリカ・デトロイト

壁から作品を取り去った人たちが、元の作品よりも良い作品に仕上げたと思われるバンクシー作品が1つだけある。それがこの作品《ダイヤモンド・ガール》(Diamond Girl)だ。バンクシーがこれをデトロイトで描いたのは、映画の宣伝でアメリカ中を飛び回っていたときだ。バンクシーの少女の顔はともかくわかんないが、取り囲む他のグラフィティはほとんど認識されている。周りのグラフィティすべてが取り除かれて1人だけになった少女は、とても印象的だった。

バンクシーがこの絵を描いた地域は、当時は荒廃したビルボードの賑わいの賑わいが残っていたが、今はまったく違って、バンクシーが描いたときからという情報をインターネットで得ると、高校を卒業してまだ数年しか経ってなかったシェーン・マクマフィは、友人のテリとリビーとともに、テリーの73年型フォクスに乗り込んでバンクシー作品を見に行った。「当時のデトロイトには西部開拓時代の精神があったんだ。私たちはそうしなければならなかった。手に入れた後にどうするつもりだったのかは、わからない。ただ、金持ちに買われるのだけは止めたかった」

バンクシーを撤去し始めたのは午前2時頃だったが、壁が非常に不安定で、前面に張り付けられたフィルムが必要だとわかった。そこで彼らはホームセンターに出かけた。そこでは午前6時を回っていた。ファンの1人、ビート・セツァグがやる。出陣前にバンクシー作品を撤去して早急で撤去した。レンガがすべてなくなっているのを見つけたが、「なぜそんなに手間をかけて、作品を撤去しなかったのか理解できなかった」と振り返る。自分自身で持ちあうかと考えたが、「騒動、それはいいことではない」と。しかし、一瞬、一番上のレンガの1つを手にとろうという感覚にかられた。「でも、ペイントが剥がれかかっていたから、置いていくことにした」。彼は仕事に出かけ、自分がリビー・マクマフィと友人たちがホームセンターから戻ってくると、作品はなくなっていた。壁にたがっていただけ

だった。「顔が真っ白になった」とシェーンは言う。「当時のデトロイトでは、何もかも金の奪い合いだった……誰の行方を見かけようとは思わなかった。もう家に帰ろう、とみんな思った」  
シェーンによれば、壁は地面に倒れ落ちたが、「誰かが私たちの計画よりも安全な方法で撤去した」かのどちらかにしない、運命を見た覚えはないという。誰かが《ダイヤモンド・ガール》にたまたま出くわして、2時間という時間の中ですべて安全に取り出したとは、とても考えられない。  
では、何が起こったのか？ シェーンは私にこう言った。「私は、あなたが撤去を止めさせたかもしれないと思って、不思議なエンディングがあることを期待していたんです。彼と会う前に、私も同じことを期待していた。というわけで、確かなことは誰にもわからない。私はやはり、真実の山になったのではないかと考えている。」



## ・80万ポンドの馬小屋(The £800,000 Stable)

イギリス・グレートヤーマスの模型村、メリパール・モデルビレッジにバンクシーがこっそり置いた馬小屋の模型は、コロナ禍で苦しむ村の観光客を50%増加させた。しかし、毎晩馬小屋を隠さなければならない恐怖に怯えたオーナーは、オークションへ出品。80万ポンドで落札される。

### 20 THE £800,000 STABLE

#### 80万ポンドの馬小屋

▼ MERRIVALE MODEL VILLAGE, MARINE PARADE, GREAT YARMOUTH NR30 3JG  
イギリス・ノーフォーク州グレートヤーマス

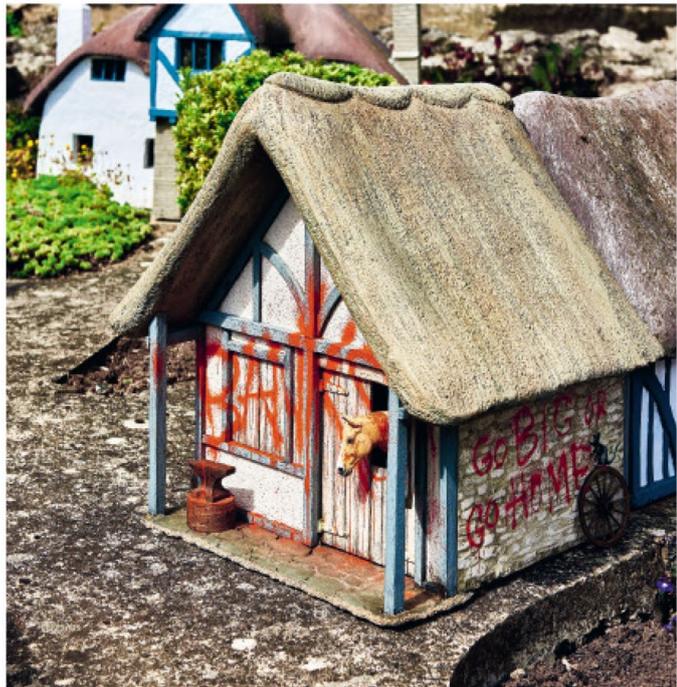
バンクシーは、周囲にいる人の注意をそらすのが得意だ。2005年にニューヨークのメトロポリタン美術館に侵入した際には、仲間が部屋の気配を察知して「警備員、警備員、二つが腕のタツに手を突っ込んだんだ。あの若い野郎を捕まえる」と叫んだ。警備員が現場で対応している間に、バンクシーは美術館の壁に自分の作品を1点展示することは成功した。  
2021年8月、グレートヤーマス(国: イングランド)東部の海辺にあるメリパール・モデルビレッジ(国: エンバウアの模型で有名な町)の模型村に、チーム・バンクシーのスタグがコロナ感染予防のマスクを付けて侵入したときも、周囲の注意をそらすことが計画の重要な目標の一つだった。運んでいたカーゴトラックの積み込み作業は、バンクシーの絵ではなく、バンクシーが作った馬小屋の模型だった。その顔合わせの日に、モデルビレッジの直線、コリン・ダロウである。私が描いたとき、バンクシーが作品をこっそり置いた場所のぼんやりとした地図をくれた。ダロウはそれから起こった異常な出来事の手帳を渡してくれた。「訪れた女性たちの1人が模型製作業者に模型をどのように作るのかを見てきたので、彼は女性を工場に案内しました。その時を持って、別の女性たちがここにドロウを呼び止めた。壁が上面から出てくる。ドロウが飛び降りたというわけですが、保安飛行だったので、魚釣り用の網を手にとりてそれを捕まようとしていました」

それは、ミニチュアで完璧に作り上げられた世界で、茶番が繰り返されたような出来事だったに違いない。チームは完璧に仕事をこなした。コリンが「ちょっとした騒動」と呼ぶこの出来事によって、バンクシーは自分の作品をモデルビレッジに追加するチャンスを得た。それは、かわいらしい小さな茶室の馬小屋で、壁にグラフィティがあった。

翌日早く、ダロウ氏は新しい馬小屋に気づいたが、「つまり、複製製作者のマツが時々やるジョークだと感じた」という。複製業者の1人が、周りにバンクシーの作品があるとモデルビレッジの自治体のオーナー、クララ・

ニューサムに伝えたのは、それから48時間後のことだった。イースト・アングリア地方の海辺の町に次々と襲撃を繰り返しているというバンクシーの「スプレーガン」(国: グラフィティに似ている「スプレー」)と「トーン」(国: 塗料)の一種だった。  
悪夢というべきか、それとも夢が叶ったというべきか。村は2年間、コロナ禍で悲惨な状況が続いていたが、バンクシーという名前のかけがえのない観光客が1日に10パーセント近く増加した。しかし、ニューサム氏はこの件を「少し怖い」と感じていた。盗難を恐れて毎晩、馬小屋を隠さなければならなかったのだ。そんなわけで、馬小屋がオークションにかけられるまでに、それは2週間しか経たなかった。作品はすべての手帳を合計で80万ポンドから100万ポンドという驚くべき金額で落札された。

ニューサム氏はオークションの直前に心臓発作を起こし、一命は取り留めたものの、数日後には妻とともにモデルビレッジの売却を決めた。現在、モデルビレッジにはグラフィティで家裏に再現された馬小屋のレプリカが建てられている。堅牢なプラスチックのケースに覆われているが、誰かがそのレプリカを破壊しようとするとは思えない。ましてや盗む人などいないだろう。





■ 広報用画像



1 Performing Monkeys  
Page 91 top  
Image credit: Trixie Delite



5024616650\_c44a703bd9\_o  
Page 57  
Image credit: Rob Corder



ashley original picture  
Page 73  
Image credit: Ashely Ovenden



IMG\_4214  
Page 43  
Image credit: Peter Senteris